

第2章 オーストラリア海兵隊を目指すのか？

—「地理」と「歴史」の狭間におけるオーストラリアの陸上戦力—

ピーター・J・ディーン

オーストラリアにおける陸上戦力の役割は、常に幾分か逆説を抱えている。オーストラリア陸軍は、絶えず2つの役割の間で板挟みになってきた。一方はオーストラリア大陸の防衛計画を立案するという地味な役割、もう一方は「偉大で強力な」同盟国（英国および米国）を支援して派遣軍を遠方に展開するという目覚ましい役割であり、後者がオーストラリア軍事史の主流となっている。このことは、オーストラリアの戦略文化において地理と歴史の2つの要素が相反する影響をもたらしたことを反映している¹。この2つのパラダイムを理解することが、オーストラリアの陸上戦力の進化と、アジアの戦略環境が一層多極化し、しのぎを削る場となっている時代にオーストラリアの戦略において陸上戦力が果たすであろう役割を理解する鍵となる。

地政学的考察—「テラ・アウストラリス（南方大陸）」から連邦へ—

オーストラリアに対する見方は多数あるが、そのほぼすべては地理的な視点を起点としている。「対蹠地」や「地球の裏側」といった表現から、固有の動植物相についての考察や唯一の「島大陸」という位置付けまで、オーストラリアの過去、現在、未来にとっての「地図」の重要性について避けて通るわけにはいかない²。

地理的位置は多くのことを明らかにする。遠隔地であるオーストラリアは地中海

¹ 地理対歴史の問題を取り上げた主要な著作の1つに次の書籍がある。T.B. Millar, *Australia in War and Peace*, Canberra, ANU Press, 1978, Chapter 21. 加えて以下も参照。Paul Dibb, 'Is Strategic Geography Relevant to Australia's Current Defence Policy?' *Australian Journal of International Affairs*, vol. 60, no. 2, 2006, pp. 247-264; Hugh White, 'Strategic Interests in Australian Defence Policy: Some Historical and Methodological Reflections', *Security Challenges*, vol. 4, no. 2, 2008, pp. 63-79.

² Desmond Ball and Sheryn Lee, *Geography, Power, Strategy and Defence Policy Essays in Honour of Paul Dibb*, Canberra, ANU Press, 2016.

の古代文明やルネサンス時代のヨーロッパにおいて、何世紀にもわたる憶測や驚嘆を呼んできた。ヘレニズム時代やローマ時代の伝説は、南方の巨大大陸の存在を予言した。古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、「地球には住めない場所が2カ所ある。1つは上方、つまり北極付近、もう1つはその反対側、つまり南極付近である」と論じた。これは論理の問題であって、「我々が住む場所が我々の極に対して有するのと同じ関係を、南極に対して有する地域があるはずだ」とアリストテレスは述べている³。古代ローマの学者クラウディウス・プトレマイオス（紀元後150年頃）は、インド洋は実は内海であり、アフリカと東南アジアを結ぶ大きな大陸があると主張した⁴。しかし、「テラ・アウストラリス・インコグニタ」（未知の南方大陸）は何世紀もの間、謎のままであり続け、中世にはキリスト教会の「地球は平らであるとする主張の影響で、南方大陸の存在を信じる見方はすべて完全に根絶した⁵。」ところが、15世紀から16世紀初めにかけて、探検航海で「地球がほぼ球形であることが確認された」ことから、南方大陸説が再び語られるようになる⁶。とはいえ、以上のような主張はすべて、地球上で最も古くから続いている人間文明であるオーストラリアのアボリジニにとっては聞くと驚かされることばかりであったろう。アボリジニは島の独特な、大部分は荒涼とした風景の中で繁栄する方法をすでに学んでいたのである⁷。

ヨーロッパ人による踏査の動きは鈍く、初期の調査ではその範囲が西オーストラリアにほぼ限られていた一方で、スラウエシ島の都市マカッサルの人々は17世紀

³ 'Meteorology' by Aristotle, circa 350 B.C.E., translated by E. W. Webster, <http://classics.mit.edu/Aristotle/meteorology.2.ii.html>.

⁴ W. J. Mills, 'Terra Australis Incognita', in Andrew J. Hund (ed.), *Antarctica and the Arctic Circle: A Geographic Encyclopaedia of the Earth's Polar Regions*, Santa Barbara, CA, 2014 (online).

⁵ 'Terra Australis Incognita', in I. C. B. Dear and Peter Kemp, *The Oxford Companion to Ships and the Sea* (2 ed.), Oxford, OUP, 2006 (online).

⁶ Ibid. オーストラリアの歴史との関連におけるこれらの見解のあらましについては、次を参照。Frank Welsh, *Great Southern Land: A New History of Australia*, London, Penguin Books, 2004, Chapter 1.

⁷ 次を参照。Geoffrey Blainey, *The Story of Australia's People: Volume 1 The Rise and Fall of Ancient Australia*, Melbourne, Penguin, 2016.

後半から北オーストラリアと交易を行っていた⁸。しかし、オーストラリア東岸の測量と地図の作製がなされるには、キャプテン・ジェームズ・クック（英海軍）による太平洋への大航海を要することになる。英国の最初の植民船団がようやく到着したのは、1788年のことであった。

英国人が対蹠地に入植した理由についての歴史学上の議論は、今なお続いている。主に議論されるのは、アイルランドの扇動家や英国の犯罪者の中の有害分子の流刑地とするためか、ヨーロッパ大陸沖の小さな島が世界一の海運大国となることを可能にした英国の海上覇権を維持するために南方大陸を征服することの戦略的重要性ゆえかである。オーストラリアの歴史家スチュアート・マッキンタイアが指摘したように、「入植の動機をめぐる論争は、公的な文書記録が非常に状況的なものであるため、必然的に決着が困難」なのである⁹。

この論争を戦略的な視点からみれば、商業的・国際的な高い優位性という論理と、オーストラリアを植民地とすることから得られる英国の海軍力にとってのメリットが浮かび上がる。南太平洋における英国の新たな前衛地は、勢力拡張、海上貿易、天然資源への明るい見通しを抱かせた¹⁰。オーストラリアはとりわけ、「帆布やロープ用の亜麻、マストやスパーに使う木材の」新たな「供給源」となることによる英国の海軍力の維持・拡大の源泉として、また、ヨーロッパ列強による海外植民地獲得競争が激しさを増す中で南太平洋における英国のプレゼンスを確立する手段とみなされた¹¹。

ヨーロッパからの入植が始まって以降、オーストラリア大陸とその周辺域の防

⁸ Marshall Clark and Sally K. May (eds.), *Macassan History and Heritage: Journeys, Encounters and Influences*, Canberra, ANU Press, 2013.

⁹ Stuart Macintyre, *A Concise History of Australia*, Melbourne, Cambridge University Press, 2005, p. 29.

¹⁰ Geoffrey Blainey, *The Tyranny of Distance: How Distance Shaped Australia's History*, Melbourne, Macmillan, 1968, pp. 26-29.

¹¹ G. J. Abbott, 'The Botany Bay Decision', *Journal of Australian Studies*, vol. 9, no. 16, 1985; Blainey, *The Tyranny of Distance*, p. 29. 以下も参照。Jeffery Grey, *Military History of Australia*, Cambridge University Press, 2008, pp. 7-8; Greg Swindon, 'Australian Naval Defence' in Craig Stockings and John Connor (eds.), *Before the Anzac Dawn: A Military History of Australia before 1915*, Sydney, NewSouth, 2013, pp. 125-126.

衛の主たる手段は英国海軍と、海域アジアにおけるアングロサクソンの優位性の維持であった。このためオーストラリアの陸上戦力には、ヨーロッパ人による植民地化が始まった当初から、大陸防衛においては比較的地味な役割が構想された。大陸防衛の役割は主として英国海軍に与えられ、1911年からはこの年に創設されたオーストラリア海軍（オーストリア内では上位軍となる）が、それを支援した¹²。1901年のオーストラリア連邦成立後は、陸軍の役割は沿岸防衛に限られ、最大で6個軽騎兵旅団と3個歩兵旅団の陸上遠征部隊の提供という潜在的な役割についての議論は「ほぼ机上の空論の域を出なかった¹³。」

オーストラリアの戦略と陸上戦力の役割

英国入植時代から、オーストラリア本土の広大さと人口の少なさ、インド洋・アジア太平洋地域における位置、島としての地位、そして保護国である大国からの遠隔性から、オーストラリアの防衛をめぐる状況は比較的、他から独立した形であった。こうした戦略的要因から、オーストラリアの防衛政策は植民地時代から「弱点、脆弱性、孤立という着想」から形作られるようになった¹⁴。

英国によるオーストラリア大陸の占領と植民地化によってもたらされたこの地理と歴史の組み合わせは、かなり独特な一連の戦略的要因を生むことになった。地球の反対側にある偉大で強力な同盟国への依存は、その地理的条件と組み合わせられたオーストラリアの歴史の1つの帰結であった。オーストラリアの戦略の核となるこの要素は結果として、長期にわたる国家安全保障戦略の策定にかなり高度な継続性をもたらした。オーストラリアの国内政治的言説の主要要素とその展開をみると、オーストラリアの戦略は主として以下に基づいている。

¹² David Stevens (ed.), *The Royal Australian Navy*, Volume III, *The Australian Centenary History of Defence*, Melbourne, Oxford University Press, 2000, pp. 5-26.

¹³ Grey, *Military History of Australia*, p. 71. 概要については次を参照。David Horner, 'The Army, the Navy and the Defence of Australia and the Empire 1919-1939', in Peter Dennis (ed.), *Armies and Maritime Strategy: 2013 Chief of Army History Conference*, Canberra, Big Sky Publishing, 2014, pp. 119-120.

¹⁴ Hugh White, 'Defence Policy', in Brian Galligan and Winsome Roberts, *The Oxford Companion to Australian Politics*, Melbourne, Oxford University Press, 2007, pp. 150-153.

- 超大国との同盟——最初は英国、次に米国
- アジアからの伝統的な脅威を抑止することを目的とした自国の防衛能力の向上（主に海・空軍の成長による）
- 積極的な二国間・多国間外交
- 外交へのリベラル国際主義的アプローチ
- 国家安全保障政策の策定における国家中心の視点
- 外交政策における「リアリズム」（現実主義）の伝統
- 世界における「オーストラリアの安全保障上の脆弱性と認識されるものについての歴史に基づく根強い不安感」と（それが招く）「悲観と不確実性」の感覚¹⁵

このアプローチの核心にあるのは逆説である。つまり、オーストラリアの地理的条件からアジアにおける大陸防衛を重視せざるを得ない一方で、偉大で強力な同盟国への依存と外交へのリベラル国際主義的姿勢から地球的課題への関与を重視しなければならないのである。後者は、同盟諸国との協力を通じての国益の追求や「ルールに基づく国際秩序」と呼ばれるようになったものの保全を目的とした、遠隔地への軍隊の派遣に重点を置くことを意味していた¹⁶。

偉大で強力な友好国と歩調を合わせながらにオーストラリアの戦略的利益を追

¹⁵ Andrew O'Neil, 'Conceptualising Future Security Threats to Australia's Security', *Australian Journal of Political Science*, vol. 46, no. 1, March 2011, pp. 19-21; Michael Wesley, 'The Rich Tradition of Australian Realism', *Australian Journal of Politics and History*, vol. 55, no. 3, pp. 324-326; Alex Burns & Ben Eltham, 'Australia's Strategic Culture: Constraints and Opportunities in Security Policymaking', *Contemporary Security Policy*, vol. 35, no. 2, August 2014, pp. 187-191.

¹⁶ Nick Bisley, 'Australia's Rules-Based International Order', *Australian Outlook*, <https://www.internationalaffairs.org.au/australianoutlook/australias-rules-based-international-order/>. 2016年のオーストラリア防衛白書は、ルールに基づく国際秩序を「国際法や地域的安全保障協定などの経時的に発展する合意済みのルールに従って諸活動を実施するすべての諸国により共有されるコミットメント」と説明している。Australian Government, *Defence White Paper 2016*, Department of Defence, Canberra, 2016, p. 15. この白書では「ルールに基づく国際秩序」という用語が191ページ中に50回以上使われている。

求するための主たる軍事的手段は、これまでのところオーストラリア陸軍であった。オーストラリアの優れた軍事史家である故ジェフリー・グレイが指摘するとおり、オーストラリア陸軍は「遠征軍歩兵部隊の質の高さ」で知られてきたのであり、それは「通常はより広範な連合軍の一部として海外へ派遣され、兵站その他の後方支援については、より強大な同盟国に依存する」ものであった¹⁷。初期の防衛政策が海軍力を軸とし、本土防衛については限定的な徴兵による市民兵によって支えられていたにもかかわらず、マオリ戦争やスーダン戦役（ニューサウスウェールズ植民地が1895年に志願兵から成る遠征部隊を編成し、大英帝国の援軍として参戦）の時代から、オーストラリアは一貫して戦争の戦略レベルにおいて遠征用の陸上戦力を用いて同盟国を支援してきた¹⁸。この傾向は19世紀末から20世紀初頭にかけてのボーア戦争の間も続き、オーストラリアの州単位に分かれた植民地のすべてが陸上部隊を編成して、南アフリカでのボーア人との戦闘に派遣した¹⁹。このため、オーストラリアは1901年1月1日の連邦化により国家として誕生した際、偉大で強力な友好国を支援するための戦争にすでに兵力を投入していたのである。

オーストラリアの陸上戦力の使用に対するこのアプローチは、第1次世界大戦時のオーストラリアの戦略文化において確立された。それ以前のマオリ戦争、スーダン戦役、ボーア戦争への兵力投入の流れに沿い、さらにナショナル・アイデンティティ²⁰とオーストラリアの戦略的利益の双方にとっての大英帝国の重要性にも合致した形で、オーストラリア政府は1914年に戦争が勃発すると、最初

¹⁷ Grey, *A Military History of Australia*, p. 5.

¹⁸ Peter J. Dean, 'The Alliance, Australia's Strategic Culture and Way of War', in Peter J. Dean, Brendan Taylor & Stephan Fruhling, *Australia's American Alliance*, Melbourne University Press, Melbourne, 2016, pp. 224-250.

¹⁹ 次を参照。Stockings and Connor (eds.), *Before the Anzac Dawn*, Chapter 6 'Australians in the New Zealand Wars' and Chapter 9 'Australian in the Wars in Sudan and South Africa.' 加えて次も参照。Craig Wilcox, *Australia's Boer War: The War in South Africa, 1899-1902*, Melbourne, Oxford University Press, 2002.

²⁰ 次を参照。Joan Beaumont, *Broken Nation: Australians in the Great War*, Allen & Unwin, Crows Nest, 2014.

の軍事的貢献として大英帝国を支援するために遠征軍陸上部隊を編成することを約束した²¹。歴史学者のネビル・メイニーは次のように指摘している。

〔第1次世界大戦〕の到来は、国民感情の熱狂的な噴出の好機であった……。オーストラリア国民は英国人種に属していることに大いに誇りを持ち、帝国はそれに応じた反応を示した。国民と指導層が1つになったのである²²。

海域アジアでは日英同盟に支えられて英国海軍が覇権を握っていたため²³、オーストラリアは大陸防衛の必要性から解放され、志願兵のみから成る遠征軍陸上部隊の編成に注力できた。それが中東と西部戦線に派遣された第1次オーストラリア帝国軍（第1次 AIF）である²⁴。この部隊は1915年から1916年にかけてオーストラリア海軍、英国海軍、大日本帝国海軍に護衛されて中東へ向かった²⁵。

第1次世界大戦中に、オーストラリアは6個歩兵師団と1個半の軽騎兵師団を編成した²⁶。これらの部隊のうち2個師団がガリポリの戦いに、5個歩兵師団が西部戦線に、2個弱の軽騎兵師団がエジプト、パレスチナおよび広く中東で戦闘などの任務に就いた²⁷。人口が500万に満たないオーストラリアから41万6,809人

²¹ C.E.W. Bean, *The Story of Anzac: From the Outbreak of War to the End of the First Phase of the Gallipoli Campaign, May 4, 1915*, Volume 1, Official History of Australia in the War of 1914-1918, Sydney, Angus & Robertson, 1940, pp. 20-36.

²² Neville Meaney, *Australia and World Crisis 1914-1923*, Volume 2, A History of Australian Defence and Foreign Policy 1901-1923, Sydney, Sydney University Press, 2009, p. 21.

²³ この同盟に関するオーストラリアの政策の観点については、次を参照。I. H. Nish, 'Australia and the Anglo-Japanese Alliance, 1901-1911', *Australian Journal of Politics and History*, vol. 9, no. 2, November 1963, pp. 201-212.

²⁴ 徴兵による市民軍の任務は本土防衛に限定されていたことから、志願兵から成る特別な部隊を編成する必要が生じた。

²⁵ David Stevens, *In All Respects Ready: Australia's Navy in World War One*, Melbourne, Oxford University Press, 2014, Chapter 5, pp. 68-82.

²⁶ 歩兵師団のうち実際に戦役に従事したのは5個のみで、6個目の師団は人員の制約のため実動せず解散した。

²⁷ Jean Bou & Peter Dennis, *The Australian Imperial Force*, Volume 5, The Centenary History of Australia and the Great War, Melbourne, Oxford University Press, 2016. Chapter 1 'The Creation of the AIF' and Chapter 2 'The Fighting Organisation'.

が志願して入隊し、そのうち6万人以上が戦死し、15万6,000人が戦傷を負うか、毒ガス攻撃に遭うか、捕虜となった²⁸。

第1次世界大戦がもたらした重要な帰結の1つは、「アンザック・デイ²⁹」が制定されたことである。この日はやがて事実上の国家的な記念日となり、第1次AIFの兵士の戦場での武勇が「アンザック伝説」として神話化され、国家はガリポリで「誕生した」との認識が生まれた³⁰。この影響力の強い神話は広くオーストラリア陸軍と関連付けられ、このためオーストラリアの文化的観点からみれば、オーストラリアの軍事力を象徴するものとなった³¹。1915年以降、陸上戦力はこのようにオーストラリアにおいて文化的な重要性を帯びるようになったが、その一方で大きな戦争や紛争のないときは、防衛政策における周辺的な役割に戻った。

オーストラリア流の戦争方法

第1次世界大戦におけるオーストラリアの軍事力の行使の仕方は、オーストラリア流の「戦争方法」といえるものを発展させた³²。この体系においてオーストラリア

²⁸ n.a., 'First World War 1914–18', Australian War Memorial, accessed 1 April 2019, <https://www.awm.gov.au/articles/atwar/first-world-war>.

²⁹ 「アンザック(ANZAC / Anzac)」という用語には複数の意味がある。「ANZAC」(Australia and New Zealand Army Corps [オーストラリア・ニュージーランド軍団])は第1次世界大戦時に編成された部隊を意味する。「Anzac」は個々の兵士を意味し、元々はガリポリに従軍したAIFの成員を指したが、後にオーストラリア軍とニュージーランド軍のあらゆる兵士を指すようになった。「アンザック湾 (Anzac Cove)」として知られるようになったアリ・ブルズ近くの上陸地点などの場所を意味する場合もある。「アンザック・デイ」は、戦死者および国のために戦った人々を思い起こす記念日である。ほかに、戦闘や方面作戦、闘志、兵士の間での伝統的な言い伝え、諸制度や政府により是認されオーストラリアの「価値観」を体現するようになった伝説・神話・精神を意味する場合もある。

³⁰ Carolyn Holbrook, *Anzac: The Unauthorised Biography*, Sydney, NewSouth, 2014.

³¹ 当初は、オーストラリア人は「生まれながら」の兵士であるという考えとも関連付けられた。この観念は第1次世界大戦の公式戦史執筆者C・E・W・ビーンによって書き残されている。次を参照。Craig Stockings, 'There is an Idea that the Australian Is Born a Soldier', in Craig Stockings (ed.), *Zombie Myths of Australian Military History*, Sydney, NewSouth, 2010, pp. 93-115.

³² ある国の「戦争方法」という概念の是非は、戦略研究において論争の余地がある。その起源は1930年代、英国の軍事史家バジル・リデル＝ハートに遡る。本稿において用いている枠組みは基本的に、各国が将来において自国軍をどのように用いるかを説明するための武力行使のパターンである。次を参照。Dean, 'The Alliance, Australia's Strategic Culture and Way of War',

の戦略文化は、超大国（最初は英国、次に米国）との長期的な戦略的同盟と、その主要な同盟相手国にとっては概して優先度の極めて低い南太平洋と東南アジアに重点を置いた地域防衛戦略という二重の必要性が中心となっている。すなわち、この戦争方法には2つの関連する系統があるということである³³。

第1の系統は、偉大で強力な同盟国との連合による武力行使を軸とする。この同盟を基礎とするアプローチは、上述のように、オーストラリアの陸上戦力の使用を中心とし、概して（強大国と比べれば）小規模な、特定分野に限ったほぼ単一部門による戦力投入が特徴である。

これらの部隊は多くの場合、より強大な同盟国の部隊に組み込まれ、同盟諸国全体の兵站システムに統合される。このアプローチでは、オーストラリアは概して戦争の2つのレベル、すなわち戦略レベル（武力行使の決定）と戦術レベル（作戦行動、交戦、戦闘）において圧倒的に活動する³⁴。オーストラリア軍事史の主流であるこのアプローチは、以下の紛争においてみられる。

- マオリ戦争
- スーダン戦役（マフディー戦争）
- 義和団の乱
- ボーア戦争
- 第1次世界大戦
- 第2次世界大戦（中東、ヨーロッパ、東南アジア）
- マラヤ危機
- 朝鮮戦争
- インドネシア・マレーシア対立

pp. 225-227.

³³ Ibid, pp. 234-235.

³⁴ USAF College of Aerospace Doctrine, Research and Education (CADRE), 'Three Levels of War', *Air and Space Power Mentoring Guide*, vol. 1, Maxwell AFB, AL, Air University Press, 1997, <https://www.cc.gatech.edu/~tpilsch/INTA4803TP/Articles/Three%20Levels%20of%20War=CADRE-excerpt.pdf>.

- ベトナム戦争
- 第1次湾岸戦争*
- 第2次湾岸戦争(イラク戦争)*
- アフガニスタン戦争
- シリアおよびイラクで継続中のISISとの紛争*³⁵

以上の戦争や紛争では、オーストラリアの陸上戦力が中東とヨーロッパへ投入された例がほとんどであるが、冷戦初期のように、アジアに重点が置かれた時期もあった。この過程においてオーストラリアの陸軍戦力は、高いレベルの相互運用性を発揮する歩兵中心の諸兵科連合部隊を軸とした極めて能力の高い戦術部隊として確立された。小規模ながら、英国や米国から引く手あまたのパートナーとなったのである³⁶。

しかしながら、特にオーストラリアの近隣地域におけるこれらの同盟関係の限界により、オーストラリア流の戦争方法へのもう1つのアプローチが発展してきた。それが、南太平洋と海域東南アジアの一部におけるオーストラリア軍による独立または半独立の統合部隊の使用を軸としたアプローチである。この第2の系統のアプローチは、以下を特徴とする。

- オーストラリアの2つの偉大で強力な友好国は、南太平洋と海域東南アジアに対してオーストラリアほどには関心を有していないとの認識
- この種の軍事行動は、かつては同盟相手国を支援するための遠征軍の派遣と比べてはるかに機会が少なかった
- オーストラリアとその隣接地域の直接的な安全保障に対する脅威と認識さ

³⁵ * を付した紛争においては、オーストラリアの軍事活動が大幅に強化された。中にはオーストラリア海・空軍が大規模に投入された例もある。

³⁶ 以下を参照。Douglas E. Delaney, *The Imperial Army Project: Britain and the Land Forces of the Dominions and India, 1902-1945*, Oxford, Oxford University Press, 2018; Christopher Hubbard, *Australian and US Military Cooperation: Fighting Common Enemies*, Aldershot, Ashgate, 2005.

れたものに対応して、またはオーストラリア独自の戦略的利益に関連して実施されるため、オーストラリアにとって同盟の一員としての活動より戦略的重要性の高い軍事行動ともいえる

- 戦争のあらゆるレベルにオーストラリアが関与
- 独立もしくは半独立の、または連合による統合作戦に大きな比重

オーストラリアの軍事史を通じ、これらの地域における特に重要な紛争や軍事行動の多くが、この戦争方法の例証となっている。すなわち、「パプアニューギニア（1914年、1942年、1944～45年）、南太平洋（1941～42年、1944～45年）、フィジー（1987年）、東ティモール（1941～42年、1999年、2006年）、冷戦終結後から現在までの人道支援・災害救援（HADR）活動や平和維持・平和強制活動を目的とした東南アジアおよび南太平洋への各種の派遣」である³⁷。

歴史と地理の格闘

一例として、上述のオーストラリアの戦略における歴史と地理の格闘が派手になされたのは、第2次世界大戦においてであった。アジア・太平洋で明らかに脅威と緊張が高まっていたにもかかわらず、1939年にヨーロッパで戦争が勃発すると、オーストラリアは中東へ派遣する大英帝国の支援部隊として第2次 AIF を編成した（オーストラリア海軍および空軍の大半も派遣された）。英国と帝国を支援するとの決定は、無知や自己満足からなされたわけではなく、帝国防衛と北アフリカの枢軸軍の速やかな打倒が、シンガポール、東南アジア、オーストラリア、ニュージーランドと南太平洋の防衛のための大英帝国の資源の確保に役立つとの固い信念に基づく判断であった³⁸。

しかし、1941年12月の日本軍による攻撃はアジアにおける大英帝国の弱点

³⁷ Dean, 'The Alliance, Australia's Strategic Culture and Way of War', p. 242.

³⁸ Craig Stockings, 'Other People's Wars', in Craig Stockings (ed.), *Anzac's Dirty Dozen: 12 Myths of Australian Military History*, Sydney, NewSouth, 2012, pp. 75-86.

を露呈させ、それ以前の1937年から1941年までの間には、英国とオーストラリアの対日政策の食い違いと帝国の防衛計画の限界が明らかになっていた³⁹。その後、オーストラリアの部隊は中東から撤退し、米国とオーストラリアの間で、南西太平洋地域における作戦行動に特化した新たな連合が形成された⁴⁰。また、アジア・太平洋における戦争は、オーストラリアの歴史の中でも特に決定的に重要なオーストラリアの戦略の特徴も浮き彫りにした。それは、オーストラリアの偉大で強力な友好国による絶対的なアジア海上覇権の重要性と、それへの依存である。

1941年から1945年までの間は、英国も米国もアジア・太平洋地域の絶対的な海上覇権を握っていなかったことにより、オーストラリアの防衛態勢と政策は劇的に変わった。太平洋戦争の終盤に米国がこの覇権を取り戻し、オーストラリアが1951年に米国と太平洋安全保障条約（ANZUS条約）を締結したが、米国が再びアジア・太平洋地域での絶対的な海上覇権を握り、1945年以降のオーストラリアの戦略的政策の重要な基盤としての位置付けが固まった。21世紀初めの十数年の間に、米国がアジアにおける絶対的な海上覇権を失ったことも含めて、この地域における米国の影響力が低下したことは、オーストラリアの戦略環境と防衛政策がますます複雑化している主な要因の1つである。

太平洋においてオーストラリアの地理と歴史が衝突した事例は、ほかにいくらかもある。1914年にはドイツ東洋艦隊からの脅威を受け、オーストラリアはドイツ領ニューギニアを確保するための統合遠征作戦を敢行した⁴¹。この戦闘では1942

³⁹ Honae H. Cuffe, 'The Limits of Empire: Australia, Eastern Appeasement and the Drift to War in the Pacific, 1937-41', *History Australia*, vol. 15, no. 4, 2018, pp. 766-784.

⁴⁰ Peter J. Dean, *MacArthur's Coalition: US and Australian Operations in the Southwest Pacific Area, 1942-1945*, Lawrence, University Press of Kansas, 2018.

⁴¹ 以下を参照。Robert Stevenson, *The War with Germany*, Volume 3, *The Centenary History of Australia and the Great War*, Oxford University Press, Oxford, 2015, Chapter 2 'A Great and Imperial Service'; Peter J. Dean & Rhys Crawley, 'Strategy and Sustainment: Australia and Amphibious Operations in the Asia-Pacific: 1914-2014', *New Interpretations in Naval History: Selected Papers from the Eighteenth McMullen Naval History Symposium Held at the United States Naval Academy 19-20 September 2013*, Newport, Rhode Island, Naval War College Press, 2018.

年から45年までの間と同様に、オーストラリアの陸上戦力は従来とは大きく異なる役割を担った。1914年にはニューギニアでドイツ軍を、1942年から45年にかけては南西太平洋地域で日本軍を打倒するため、オーストラリア軍は戦争の作戦レベルで統合遠征部隊を展開しなければならなかった。1914年もであったが、特に1942年から45年にかけて、オーストラリア陸軍は自らの役割を、英国陸軍に歩兵部隊を提供する大陸型陸上部隊から、海洋環境における水陸両用作戦とジャングル戦に重点を置く統合遠征部隊へとイメージを新たにせざるを得なかったのである⁴²。

オーストラリアの戦略上の中心的な利益は、冷戦後、近隣地域への関与を通じても追求された。オーストラリアはこの時期、平和維持・平和強制活動を目的としてメラネシアに部隊を投入する大規模な軍事行動を実施している⁴³。これらの地域的活動におけるオーストラリア陸軍の役割は、一般に認識されているよりも、かなり広範囲であった。1972年（南ベトナムへのオーストラリアの関与が終わった年）から2007年までの間に、オーストラリア陸軍が隣接地域に部隊を派遣した任務は80件を超える。その活動の範囲は、小規模な地形測量任務から、大規模なHADR活動、抑止行動、戦略的駐留任務までさまざまである。1987年の軍事クーデターを受けてフィジー沖で実施されたモリス・ダンス作戦などの作戦行動もあれば、1999年と2006年の東ティモール、その他にソロモン諸島などで実施されたような非常に大規模な平和維持・平和強制活動もあった⁴⁴。

「歴史の終わり」—オーストラリアの陸上戦力の将来—

最新の戦略環境において、オーストラリアの戦略ドクトリンの伝統的な基盤は急速に損なわれている。現在、大国であり、同盟国である米国が、太平洋で絶

⁴² Peter J. Dean, 'To the Jungle Shore: Australia and Amphibious Warfare in the SWPA 1942-1945', *Global War Studies*, vol. 11, no. 2, 2014, pp. 64-94.

⁴³ John Blaxland, *East Timor Intervention: A Retrospective on INTERFET*, Melbourne, Melbourne University Press, 2015.

⁴⁴ John Blaxland, *The Australian Army: From Whitlam to Howard*, Melbourne, Cambridge University Press, 2014, Appendix Operations, 1972-2007, pp. 366-377.

対的な海上覇権を維持してくれようとは、もはや当てにできない⁴⁵。世界の重心はもはやヨーロッパや北半球にはない。アジアは今や、戦略的競争や列強の対立の場となることを免れられない⁴⁶。

かつては、自由民主主義への支援、開かれた世界貿易（自由市場を含む）へのコミットメント、米国の覇権的リーダーシップの下でのルールに基づく世界秩序、海域アジアにおける米国の絶対的な覇権といった要因が、ANZUS 関係に不変の性質をもたらしたかにみえていた。したがって、米豪同盟（オーストラリアでは単に「同盟」と呼ばれることが多い）は不変の性質と、締結後何十年もの間に戦略的状況の変動に合わせて修正されてきたことから、変化する特性を合わせて体現してきた。この不変の性質のおかげで同盟の特性は、英国のアジアからの撤退、ニクソン・ドクトリンとベトナム戦争の終結、冷戦の終結、テロに対する世界的規模の戦争の開始といった歴史上の画期において変化し適応することができた。冷戦終結以降は、同盟の不変の性質のおかげで、オーストラリアの陸上部隊は米国を支援する目的で政治的に選択された遠隔地での戦争に従事することが大半となり、最近ではイラクとアフガニスタンを中心に中東へ派遣されることがほとんどである。

ところが、2011年のバラク・オバマ大統領のオーストラリア連邦議会での演説で、すべてが変わった。オバマ大統領のいうアジアへの「転換」（後に「リバランス」）は、同盟の特性の最近の変化の先駆けとなっただけでなく、その根底にある基盤に何年も前から生じていた大きな亀裂を顕わにした。何より重要なのは、この政策がアジアにおける力関係の変化と中国の台頭の反映であったとともに、第2次世界大戦の終結後に確立され、ベトナム戦争での米国の敗北後も何十年にもわたって存続してきた米国のアジア・太平洋地域における絶対的な覇権の終

⁴⁵ Michael J. Green, Peter J. Dean, Brendan Taylor and Zack Cooper, *The ANZUS Alliance in an Ascending Asia*, The Centre of Gravity series, no. 23, Strategic and Defence Studies Centre, Canberra, 2015, http://sdsc.bellschool.anu.edu.au/sites/default/files/publications/attachments/2015-12/COG_%2323_Web_4.pdf.

⁴⁶ Parag Khanna, *The Future Is Asian*, New York, Simon & Schuster, 2019.

焉という現実を明らかにしたことである⁴⁷。

2000年以降、米国の相対的な力の低下とグローバルな力の構造の多極化が重要性を増している。中国やイランなどの国々の台頭と、この両国のほか北朝鮮やロシアなどからの米国優位のルールに基づく国際秩序に対する抵抗の増大により、世界の戦略的秩序が再編されている⁴⁸。中東における紛争に関与するオーストラリア陸軍の縮小と、それに伴ってインド洋・太平洋を重視する傾向の強まりは、アジアの戦略環境の変化と同義である。さらに、米国政治の内向き志向とトランプ大統領のレトリックは、ルールに基づく国際秩序の残された部分をさらに損なう方向に働いている。以上のような状況は、オーストラリアの現代の戦略環境が1951年のANZUS条約調印以降のどの時点のものとも根本的に異なることを意味する。すなわち、今の時代は米豪同盟のさらなる特徴の変化が生じているだけでなく、同盟の基本的な性質が根底から作り直されつつあるのである⁴⁹。

多くの意味で、こうした変化は「放棄」と「陥穽」という同盟政治の古典的なジレンマに対するオーストラリアの認識を逆転させた⁵⁰。オーストラリアは1世紀以上の間、大国である同盟国を南太平洋と東南アジアの安全保障へ関与させ続けようと努力する中で、偉大で強力な友好国から見捨てられることを怖れていた。この怖れは当初は大英帝国と日本の台頭をめぐる懸念、その後は米国と東南アジアへの共産主義の脅威、そして1960年代から1990年代にかけてのインドネシアの台頭をめぐる懸念として表れた⁵¹。

⁴⁷ Hugh White, *The China Choice*, Melbourne, Black Inc., 2013.

⁴⁸ これらのパワーシフトの結果としてのアジア地域における変化の一例と、それがオーストラリアに及ぼす影響については、次を参照。Nick Bisley, *Integrated Asia: Australia's Dangerous New Strategic Geography*, Centre of Gravity Series, SDSC, Canberra, 2017, <http://sdsc.bellschool.anu.edu.au/experts-publications/publications/5330/integrated-asia-australias-dangerous-new-strategic-geography>.

⁴⁹ Peter J. Dean, 'Donald Trump and the Changing Nature of ANZUS', *Sydney Morning Herald*, 11 November 2016, <https://www.smh.com.au/opinion/donald-trump-and-the-changing-nature-of-anzus-20161111-gsnm97.html>.

⁵⁰ Stephen Walt, 'Why Alliances Endure or Collapse', *Survival*, vol. 39, no. 1, 1997, pp. 156-179.

⁵¹ 以下を参照。Peter Edwards, *Crises and Commitments: The Politics and Diplomacy of Australia's*

先頃、パプアニューギニアのマヌス島にある共同海軍施設（米国とオーストラリアが最後に使用したのは太平洋戦争時）に関するコミットメントが明らかにされたものの⁵²、この地域における現代の戦略上の問題の大半は、中国の台頭に直面した米国のアジア諸地域への関与が焦点となってきた。これらの要因から、オーストラリアでは米国との同盟に引きずられて北東アジアにおける中国との紛争への陥穽の可能性をめぐる懸念が、米国ではそのような紛争が起きた場合や、南シナ海での航海の自由などのこの地域における米国の利益の追求に際しての、オーストラリアによる放棄をめぐる懸念が高まっている⁵³。

以上のすべての要因から、現代の戦略環境においてオーストラリアの歴史と地理は今や不可逆と思える勢いで衝突したといえる。インド洋・太平洋における戦略地政学的バランスが不安定化し、米国の絶対的な海上覇権の終焉と中国の台頭に伴いこの地域の多極化が進む現代にあって、戦略環境はヨーロッパ人による占領と植民地化以来のオーストラリアの歴史のどの時期のものとも根本的に異なる。したがって、我々が今、目にしているのはオーストラリアの戦略の使用の伝統的な基盤にとっての「歴史の終わり」であり、オーストラリアが偉大で強力な友好国を支援するため、戦略レベルで1つの軍種に特化して編成された遠征部隊を世界各地に派遣し続けることの重要性とその能力が疑問視されているのである⁵⁴。

Involvement in Southeast Asian Conflicts 1948-1965, Volume 1, The Official History of Australia's Involvement in Southeast Asian Conflicts 1948-1975, Allen & Unwin, North Sydney, 1992; James Curran, *Unholy Fury: Whitlam and Nixon at War*, Melbourne, Melbourne University Press, 2015.

⁵² Natalie Whiting, 'Joint US-Australian Naval Base on Manus Island a 'Significant Pushback' against China's Pacific Ambitions', ABC News, 18 November 2018, <https://www.abc.net.au/news/2018-11-18/us-pushes-further-into-pacific-with-png-manus-naval-base-deal/10508354>; Ben Wan Beng Ho, 'The Strategic Significance of Manus Island for the U.S. Navy', *Proceedings*, vol. 144, December 2018, US Naval Institute, <https://www.usni.org/magazines/proceedings/2018/december/strategic-significance-manus-island-us-navy>.

⁵³ Green, Dean (et al.), *The ANZUS Alliance in an Ascending Asia*, p. 8.

⁵⁴ 「歴史の終わり」という概念は、フランシス・フクヤマの1992年の著書 *The End of History and the Last Man* (邦訳『歴史の終わり』) に連なるものだが、本稿ではポストモダン的な意味で使用しており、イギリスの歴史学者キース・ジェンキンスの言葉によれば、この段階は「過去を史実として解釈する(モダニズム的で、直線的で、本質的にメタナラティブな形に概念化する)のに用いられる特異な方法が、その生産寿命の終わりを迎えた」ことを意味する。Keith Jenkins, *Why History? Ethics and Postmodernity*, London, Routledge, 2001, p. 57.

オーストラリアの戦略環境が変わり続ける中で、この歴史的な戦略的手法を用いた部隊派遣は、規模が縮小し、期間が短縮され、政府の裁量と抑制がより大きく働く方向へ向かうであろう。

このようなアジアの安全保障環境の変化は、オーストラリアの陸上戦力に大きな課題を突きつけている。過去20年にわたり、オーストラリア陸軍は中東での米国の軍事行動を実施・支援しながら、隣接地域における自国の利益の維持にも当たってきた。中東への部隊派遣は高いリスクを伴い、かつ、多くの場合は流動的な性質を帯びることから、オーストラリア陸軍はこの種の軍事行動のための部隊の編成、訓練、派遣、維持に多額の投資を余儀なくされてきた。これが陸軍の努力の中心であった。

しかしながら、アジア・太平洋における地域的活動も、これと併存する陸軍の作戦行動の特徴であった。この戦略的必要性から、オーストラリア海軍は大型のドック型ヘリコプター揚陸艦2隻を含む新造水陸両用艦艇3隻を就役させ、陸軍に水陸両用・洋上展開能力を有する部門が組織された⁵⁵。しかし、この動きはオーストラリアの陸上戦力の中心的な努力としてはなかなか現れてこず、他の開発分野より機会費用が少ないとみなされることが多かった。例えば、「沿岸帯環境における海上作戦(MOLE)」(2004年)などのドクトリンや概念に基づく取り組みを放棄し、代わりに(ほかにもあるが特に)「陸軍の強化とネットワーク化」(2005年)⁵⁶などのプログラムに重点を置くといったことである。このプログラムは、陸軍を「陸上戦力の規模を拡大し、火力を増強して部隊に対する防御を強化し、将来の戦場における通信能力の向上を図る」ことに注力させるものである⁵⁷。このよ

⁵⁵ Peter J. Dean, 'Amphibious Operations and the Evolution of Australian Defence Policy', *Naval War College Review*, vol. 67, no. 4, 2014, <https://digital-commons.usnwc.edu/cgi/viewcontent.cgi?referer=https://www.google.com/&httpsredir=1&article=1350&context=nwc-review>.

⁵⁶ Peter Leahy (Chief of Army), 'Towards the Hardened and Networked Army', *Australian Army Journal*, vol. 2, no. 1, winter, 2004, pp. 27-36.

⁵⁷ Commonwealth of Australia, *The Hardened and Networked Army*, Department of Defence, Canberra, 2005, <https://apps.dtic.mil/dtic/tr/fulltext/u2/a481036.pdf>. これは、この作業プログラムがオーストラリア陸軍の海洋環境での作戦・戦闘能力の将来にとって重要でないと主張するものではなく、優先事項と重点を例示するものである。

うに、中東への戦略的な部隊派遣の支援と維持が続けられる一方で、インド洋・太平洋における作戦行動のための海上部隊の創設にかかる時間と努力は失われた。陸軍の戦闘能力と実戦経験で重要な恩恵に浴したことは、ここでの大きなプラスの代償である。

オーストラリアがインド洋・太平洋地域における活動に再び目を向けつつある中で、戦略環境の変化と並行して作戦状況も変わっているとの認識が生まれている。この地域の陸地は今や都市沿岸帯の運用環境が大半を占めている。こうした環境では、陸上戦力は洋上展開能力に大きく依存する。このため、オーストラリア陸軍は海上輸送や水陸両用戦作戦のための組織づくり、訓練、装備にさらに注力する必要がある、特に、沿岸帯から海や空を経て都心部、郊外地域、内陸地域に接近するための手段の確保が求められる⁵⁸。

したがって、オーストラリアの陸上部隊は引き続き、運用思想の焦点を次のような観点から定め直さなければならない。すなわち、沿岸帯における機動力、直面する脅威の種類、実施が求められる作戦の種類について、海上保安作戦、海上軍事演習と外交、人道支援・災害救援 (HADR) 活動、非戦闘員救出作戦、地域の警備任務、従来型の水陸両用襲撃・撤退・強襲における陸上部隊の役割も含めて検討する必要がある。このような視点で見れば、統合海上領域拒否能力などの効果をもたらすに当たって陸上部隊が中心的な役割を果たすことのできる紛争のスペクトラムの中間から上のレベルの作戦のためのドクトリンや装備へのさらなる投資の必要性も生まれる。これはオーストラリア陸軍の場合、新世代の地上配備型防空設備や地上発射長距離ミサイルということになる⁵⁹。

高強度の紛争における作戦では、「敵の攻撃の効力を弱め、戦闘地域に接近し、敵を〔戦闘地域へ〕接近させない」ことを目的とする分散型の水陸両用部隊

⁵⁸ Peter J. Dean, *The ADF and the Indo-Pacific Operating Environment*, Indo-Pacific Insight Series, Perth USAsia Centre, 6 November 2018, <http://perthusasia.edu.au/the-adf-and-the-indo-pacific-operating-environment>.

⁵⁹ Chris Smith and Al Palazzo, *Coming to Terms with the Modern Way of War: Precision Missiles and the Land Component of Australia's Joint Force*, Australian Land Warfare Concept Series (Vol. 1), Canberra: Australian Army, p. 15.

の一部として陸上戦力が担うことのできる役割にも重点が置かれなければならない⁶⁰。この文脈において、オーストラリアの陸上部隊には、高度なサイバー攻撃対処、自律型システム、極超音速技術、指向性エネルギー兵器、衛星の配置、さらには「無人システム、センサー、通信、[精密誘導]兵器」の拡張と発達などを含む、新技術や殺傷能力の向上、射程距離の延長を組み入れた軍事システムを提示し統合する新たな運用概念とドクトリンが必要である⁶¹。こうした現代の戦場において、オーストラリアの陸上部隊は真に一体化した統合軍を創設するため、空軍および海軍と十分に融合しなければならない。

インド洋・太平洋の沿岸帯の運用環境において、オーストラリアの陸上部隊がいかなるレベルの紛争でも機能するためには、これまで100年以上にわたってオーストラリア陸軍の作戦へのアプローチの主流であった大陸型陸軍のドクトリンよりも、海兵隊式の運用概念に沿ったドクトリンを検討し、発展させ、策定する必要がある。そうとはいえ、オーストラリア陸軍の伝統、歴史、価値観、経験のすべてを捨てるべきだというわけではない。隣接地域での、あらゆるレベルの紛争における過去の作戦行動を推進してきた諸要素をさらに大いに活用するとともに、将来に向けたドクトリン、作戦、装備品開発に力を入れるべきだということである。

この方向へ進むためには、オーストラリア陸軍にはドクトリン上大幅な、そして文化上いくらかの転換がともに必要となる。また、装備品開発にかかわる意思決定の多くを再評価することも求められよう。例えば、陸軍の次世代装甲戦闘車両「Land400計画」は、「200億ドルをかけて……15年間で軍用車両675台の納入が期待され……オーストラリア陸軍史上で最大かつ最も高額な調達計画」である⁶²。この計画はこれまでのところ、インド洋・太平洋における統合海上・水陸両

⁶⁰ Bryan Clark & Jesse Sloman, *Advancing Beyond the Beach: Amphibious Operations in an Era of Precision Weapons*, Washington, D.C., Center for Strategic and Budgetary Assessments, 2016.

⁶¹ Kim Beazley, 'The Alliance—Dependence Grows as our Options Narrow', *The Strategist*, 1 May 2018.

⁶² Land Vehicle Combat System, Land 400, <http://www.defence.gov.au/dmo/EquippingDefence/Land400>, accessed 4 April 2019; Project LAND 400, <https://www.army.gov.au/our-future/modernisation-projects/project-land-400>, accessed 4 April 2019.

用作戦向けに最適化されたものというよりも、伝統的な大陸での作戦における陸上戦力の使用に適した車両の調達に重点が置かれている。

結論

オーストラリア陸軍に関する大きな問いは、この新たな戦略環境にどこまで適応する必要があるか、そして、オーストラリア政府はいかにしてオーストラリアの陸上戦力の戦略的使用を構想し続けるのかという点である。オーストラリアの陸上戦力は、1世紀以上にわたる作戦行動を通じてその適応能力を証明してきており、第1次世界大戦中の1914年と第2次世界大戦中の1942年から45年までの間、さらには1987年以降、オーストラリア国防軍の南太平洋と東南アジアへの部隊派遣の主流となってきた平和維持活動およびHADR活動において行ってきたように、国家の必要性に合わせ、統合海上作戦を遂行するという優れた伝統を有している。しかしながら、この現在の課題は先例のないものである。上述のような変化の多くは、同盟を基盤とする支配的な戦略文化や、100年以上にわたりオーストラリアの陸上戦力の使用法を左右した戦争方法における最重要ポイントと相容れないものである。この課題を認識し、国の戦略的アプローチと陸軍のドクトリン、文化、装備を進化させることでそれに適応することは、オーストラリアの陸上戦力がこれまでに直面した中で最大の課題の1つである。